

第八章 民俗芸能

第八章 民俗芸能

第一節 概 説

一 民俗芸能とは

社寺の祭礼や、集落の年中行事などに、五穀豊穡ごこくほうじょうや子孫繁栄こくぞくはんえい、災厄除去さいやくじょなどを願って人々が演じてきた芸能を、民俗芸能という。民俗芸能は都市を中心に発達した舞台芸能とは異なり、地域の人々の生活や信仰に密着した芸能であり、その由来や伝承、芸能の構成や歌詞の内容などに地域性を色濃く反映したものが多い。

東北地方では古来、夏の日照不足などによる飢饉ききん・疫病えきびょうが深刻であったため、人々の豊作への切実な願いが多くの民俗芸能を発達させてきた。特に東北地方の南部に位置する福島県では、江戸東京を中心とする関東圏や新潟などの日本海文化圏にも接しているため早くから多彩な芸能文化が流入し、多くの民俗芸能が継承されてきた。

二 矢吹町の民俗芸能

民俗芸能には多くの種類があるが、学術的には、神座かみくらに神を迎えておこなわれる鎮魂ちんこんの神事が芸能化した神楽、稲の豊作を祈願する田楽でんがく、災厄をもたらず怨霊おんりょうを華やかな衣裳やにぎやかな囃子はやしで鎮めたり追い払おうとする風流ふうりゅう、言葉の力で福を呼び招こうとする語り物などに大別される。

矢吹町内にはこのうち神楽は伝えられていないが、田楽に含まれる三城目の平鞞踊り、風流に含まれる三城目や明新などの獅子舞、大和久の天道念仏踊り、根宿や田内の天王祭太鼓、矢吹の祭り囃子、語り物に含まれる中畑の会津万歳などが伝えられている。

近年、人々の生活スタイルや価値観が変化し、多くの民俗芸能が後継者不足によって中断の危機に追い込まれているが、矢吹町の各地区に伝わる民俗芸能にも中断・廃絶に追いこまれたり、その危機に瀕ひんしているものが多い。

そうした中で、昭和五十年に矢吹町が県から「文芸のふるさと」の指定を受けたのをきっかけに、町教育委員会が中心となつて、文芸とともに失われつつある町内の民俗芸能の掘り起こし事業がはじまった。その成果により、同五十四年十一月に第一回「ふるさと民俗芸能のつどい」（同五十六年の第三回からは「民俗芸能祭」）が開かれ、これを発表の場として、衰退しつつあつた多くの民俗芸能が再興された。町の民俗芸能祭は平成五年の第一五回まで毎年開催され、町外からの招待分も含めて延べ八六団体が出演した。「民俗芸能祭」の様子は、その多くがビデオテープなどの記録にも残されている。

この町教育委員会による民俗芸能掘り起こし事業の過程で、明新の獅子舞や大和久の天道念仏踊り、根宿のごんたん踊りといった中断していた民俗芸能が復活・再興するなど、一定の成果をおさめた。しかし平成にはいると、矢吹町内でも少子高齢化などの影響により各地区で民俗芸能の維持・継承が次第に困難になり、いったんは再興した民俗芸能が再び中断の危機に追いこま

【表1】民俗芸能祭開催一覧表

	開催年月日	開催場所	演目
第1回「ふるさと民俗芸能のつどい」	昭和54年 11月11日	矢吹町民 体育館	田内の天王祭太鼓／原宿の二十三夜念仏太鼓／万才／中畑の土搦ぎ歌／大和久の天道念仏踊り
第2回「ふるさと民俗芸能のつどい」	昭和55年 11月9日	矢吹町民 体育館	原宿の熊野講／大和久の天道念仏踊り／三城目平鍛踊り／根宿のおみしゃく／もぐらぶち（むぐらぶち）／矢吹の祭りばやし
第3回「矢吹町民俗芸能祭」	昭和56年 11月8日	善郷小学校 体育館	根宿の天王祭太鼓／中畑の祈祷念仏／三城目の歌念仏踊り／大和久の天道念仏踊り／根宿のねむた流し／三城目の獅子舞・平鍛踊り／須釜の念仏踊り（玉川村）
第4回「矢吹町民俗芸能祭」	昭和57年 11月7日	矢吹町 中央公民館	神田の田うない踊り／神田のすもう踊り／中畑の万才／石井の七福神（二本松市）／三城目のお天念仏／須乘の稲虫送り／中畑の山歌（草刈歌）／羽島の長持歌／矢吹の馬喰節／明新の熊野講
第5回「矢吹町民俗芸能祭」	昭和58年 9月25日	矢吹町 中央公民館	松倉のすもう太鼓／大和久の天道念仏踊り／明新の獅子舞／胸形の念仏太鼓（平田村）／神田の神事太鼓／根宿の盆踊り／田内の盆踊り／神田のはねっこ踊り
第6回「矢吹町民俗芸能祭」	昭和59年 9月30日	二区 お祭り広場	原宿の熊野講／松倉のむじな打ち／明新の獅子舞／根宿のごんたん踊り／原宿の土突き歌／大和久の天道念仏踊り／二区の祭り囃子／安佐野の会津万才（郡山市）
第7回「矢吹町民俗芸能祭」	昭和60年 9月15日	矢吹町 中央公民館広場	神田の田うない踊り／神田のすもう踊り／田内の天王祭太鼓／苅宿の鹿無（浪江町）／原宿の二十三夜念仏太鼓／明新の獅子舞／三城目の獅子舞・平鍛踊り／原宿の熊野講
第8回「矢吹町民俗芸能祭」	昭和61年 9月28日	矢吹町 中央公民館広場	矢吹の祭り囃子／ぶち合わせ太鼓／比曾の三匹獅子舞（飯館村）／二区の盆踊り／根宿のはねっこ踊り
第9回「矢吹町民俗芸能祭」	昭和62年 11月1日	矢吹町 中央公民館広場	中畑の会津万才／三城目のお天念仏／松倉のすもう太鼓／古寺山の自奉楽／五区の盆踊り
第10回「矢吹町民俗芸能祭」	昭和63年 10月30日	矢吹町 中央公民館 大ホール	三城目のすもう甚句／中畑の山唄（草刈唄）／矢吹の馬喰節／三神音頭／中畑小唄／矢吹音頭／北須釜獅子舞・平鍛踊り（玉川村）／大和久の天道念仏踊り／根宿のごんたん踊り／明新の獅子舞
第11回「矢吹町民俗芸能祭」	平成元年 10月29日	矢吹町 中央公民館広場	お天念仏／一区祭り囃子／関辺のさんじもさ踊り／二区祭り囃子／三城目獅子舞・平鍛踊り／北陵太鼓
第12回「矢吹町民俗芸能祭」	平成2年 7月23日	中畑（原宿） 正福寺境内	ぶち合わせ太鼓／北陵太鼓／原宿二十三夜講
第13回「矢吹町民俗芸能祭」	平成3年 7月25日	大和久 日吉神社境内	大和久の天道念仏踊り／北陵太鼓／一区祭り囃子
第14回「矢吹町民俗芸能祭」	平成5年 2月6日	寺内 阿弥陀堂	寺内の数珠繰り
第15回「矢吹町民俗芸能祭」	平成5年 7月14日	根宿 八幡様境内	根宿の天王祭太鼓

れているところもある。

なお、一五回にわたって開催された矢吹町民俗芸能祭（第一、二回は「ふるさと民俗芸能のつどい」の開催時期、場所、出演団体などは表1のとおりである。

第二節 三城目の獅子舞と平鍬踊り

三城目では数年に一度、御霊神社ごたまの秋祭りの日に、獅子舞しし舞と平鍬踊りひらくわおどが踊られる。御霊神社の秋祭りは、もとは旧暦九月九日であったが、昭和三十年代から新暦十月二日に変更され、さらに近年は十月第一日曜日となっている。

獅子舞と平鍬踊りは、豊作の年にかぎっておこなうのがならわしで、その年におこなうかどうかは事前に地区内で相談して決めている。平成十五年度は、記録映像の制作をかねて十月五日の日曜日におこなわれた。

獅子舞も平鍬踊りも、ともに三城目地区全体で継承してきたもので、毎回、区長が重要な役割を果たしてきた。昭和三十一年に、区長が奉納の年ごとに交替すると保存と継承に困難をきたすとの理由から、当時の区長と三神村長らが発起人となって保存会の鎌倉会が結成され、現在にいたっている。なお、「鎌倉会」の名称は御霊神社の祭神である鎌倉権五郎景政かまくらごんごろうかげまさに



【写真1】三城目獅子舞

ちなむものである。

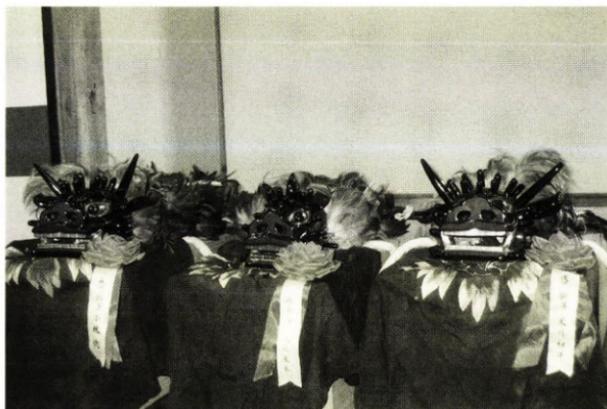
一 三城目の獅子舞

由来と伝承

三城目の獅子舞には次のようないい伝えが残る。延享元年（一七四四）に景政寺の住職となり、明和七年（一七七〇）に亡くなった祐伝上人が、当時村内の相築家から御霊神社に奉納されてあった三つの獅子頭をみて、獅子舞をつくることを思いつき、振りつけ、太鼓、歌などのすべてをまとめてこれを村人に教え、長く後世に残すよう遺言して亡くなったという。獅子舞のすべてが祐伝上人の創作であったとは考えにくい。当地はじめ県南地方に獅子舞が伝えられたとみられるのがちょうどこのころであり、当地への獅子舞の普及、定着にあたって祐伝上人がなんらかの指導的立場を果たしたとも考えられる。景政寺の参道入口には、この祐伝上人の供養碑があり、亡くなったとされる明和七年九月十六日の日付がみえる。

獅子頭は相築家が御霊神社に奉納したものと伝えられるが、この獅子頭がいつどこで購入されたものかなどは、一切伝わっていない。子どもが被る小さな

もので、材料は桐である。太郎獅子と次郎獅子の二つの雄獅子は頭に長い角二本と、こぶ状の突起が三〇個ある。雌獅子は雄獅子より全体的に小さく頭の真ん中に角が一本と、やはりこぶ状の突起が三〇個ついている。相築家の当主であった故・眞一の手記『屑籠第七集 千両箱』によると、明治のはじめに同氏の祖父が漆を塗りかえ、その後、昭和三十三年に同氏が会津若松市の



【写真2】三城目獅子舞 右：次郎獅子 中：雌獅子 左：太郎獅子

田代漆器店に依頼して再度塗りかえをしたという。すでに二百数十年が経過しているとは思えないほど、現在も光沢が鮮やかである。

役名と衣裳・道具

獅子役は太郎獅子、次郎獅子、雌獅子ともに、地区内の一二、三歳の長男と決まっているが、地区内にある三つの寺院の檀家からそれぞれ一名ずつを総区長と、獅子舞と平鞞踊りの保存団体である鎌倉会の会長が選出することになっている。三城目は大きな集落（平成十五年現在の世帯数二六四戸）であり、数年に一度しかおこなわれず、かつ長男にかざられるため、同世代の男子の中で獅子役に指名されることは名誉なこととされてきた。

獅子役は獅子頭を被り、長袖の袴（かまばら）にモンペをはき、手甲（てまが）をして、太鼓をつけ、後ろ腰に幣束（へいぐち）二本をさす。さらに雄獅子は黄色、雌獅子は赤のたすきをかける。

囃子方は獅子舞と平鞞踊りが続けておこなわれるので、共通である。笛と歌い手があわせて数名で、羽織袴で白扇子を持つ。なお、かつては鉦（かね）きりとささらすりもついたという。

次第と演目

祭日の朝、常宿となっている相楽家で身支度をしてから舞いはじめ、御霊神社、景政寺、澄江寺（じやうかうじ）、城見寺（じやうけんじ）、神宅の庭のほか、地区内の小祠や「旗杭（はたて）」（のぼりが立てられる集落内の要所）とよばれる場所など、一二か所をほぼ一日がかりで巡って各所で舞い、最後に再び相楽家に戻って舞い納めとなる。なお、各所では必ず獅子舞、平鞞踊りの順で演じられる。

平成十五年は十月五日に、おおむね次の順路で地区内一三か所を回って演じられた。

午前六時 相楽家に集合

午前七時 相楽家の庭

午前八時 御霊神社

午前九時 景政寺

午前十時 神官宅（赤塚家）の庭

午前十一時 澄江寺

午前十一時半 中町（もとの旗杭）

午後零時 横石（旗杭）

午後零時半 集落センター

午後一時 昼食

午後一時半 西原公民館

午後二時半 寺の前（旗杭）

午後三時半 下町の郵便局前（旗杭）

午後四時 城見寺

午後五時 相楽家の庭

午後五時半 笠抜き（直会）

なお、以前は前日の夕方に宿の相楽家で「笠揃い」といって一庭舞い、当日は御霊神社から舞いはじめたようである。舞は次の一三の演目で構成される（平成十五年度）。

① 行進（上り） 区長、警護、囃子方・歌、師匠、役員の順で列を組み、道中囃子につれて進む。

② 拝礼の舞 太郎獅子と次郎獅子の二人のうしろに雌獅子が立ち、拝礼する。

③ 立ち上がりの舞 そのまま立ち上がる。

④ 岡崎の舞 雌獅子を中心にして、横一列に並び、前後左右に進みながら舞う。

⑤ 足踏みの舞 足踏みをするようなくさをする。

⑥ 千鳥の舞

太郎獅子、次郎獅子、雌獅子の順で、千鳥足で舞う。

⑦ 大岡崎の舞

ばちを頭の左右にあて、大きく体を揺らす。

⑧ 歌入りの舞

ばちを右から左へ、次に左から右へ振り、太鼓を打つ。

⑨ 御幣の舞

雌獅子が幣束を両手にとつて掲げ、足も上下させて舞う。

⑩ どっこいまかせ

雌獅子奪い的一种で、まず次郎と雌獅子が向きあつて腰を落として太鼓を打っている回りを、太郎が巡る。次に、太郎獅子と雌獅子が向きあい、その回りを次郎獅子が巡る。

⑪ 入れ違いの舞

太郎獅子・次郎獅子と雌獅子が入れ違いになって舞う。

⑫ 京から下り

太鼓を打ちながら、足を交互に前に出しては、飛びあがる。

⑬ 下り

舞いながら次の道行の列になり、道中囃子につれて次の舞庭に向かう。

以上の演目が一三か所それぞれで一通り演じられ、約三〇分を要する。

このうち、「歌いりの舞」の部分に歌がはいるが、五七五調で、おこなわれる場所によって次のように歌詞もかわる。

相楽家（舞初め）

この獅子は相楽の氏より納めおき 末の世までも民ぞよろこぶ 民ぞよろこべ

神社

この森に誰が住むやら鈴の音 誰が住むまで御神楽ぞ住む 御神楽ぞ住む

大門に大旗小旗立て並べ 神に瑞しき綾の幕張り 綾の幕張り

景政寺

この獅子は祐伝閑居のお作にて 末の世までも氏子よろこぶ 氏子よろこぶ

澄江寺

十里馬場七里きだはし打ち登り 寺へ参るも末の世のため 末の世のため

神官宅

この酒をなんと呑んだよ連れの衆 都下りの加賀の菊酒 加賀の菊酒

区长宅

庄屋さまもとを繁昌と見申せば 八郷八村の司めさるる 司めさるる

旗杭

磐石の岩はくずれてかかるとも 心静かにあそべわがつれ あそべわがつれ

城見寺

十七はしだれ桜をひき止めて これに宿れや十五夜の月 十五夜の月

明武様

朝日さし夕日輝く明武様 諸願成就の獅子をあげます 獅子をあげます

相楽家（舞い納め）

この庭は遊びからした庭なれど しでがこはれてはちにからまる ばちにからまる

この獅子は相楽の氏へと納めおき 末の世まで氏子よろこぶ 氏子よろこぶ

二 三城目の平鍬踊り

由来と伝承

平鍬踊りは、県内では当地のほか石川郡など中通り南部に伝わる田楽系の芸能である。三城目では、獅子舞とともに数年に一度、豊作の年にかぎっておこなわれ、必ず獅子舞、平鍬踊りの順で、対たいになって踊られる。このよ

うに、県内で平鉾踊りを伝えるところの多くでは獅子舞と対になって踊られているが、風流系の芸能である獅子舞とは系統が異なる。

三城目の平鉾踊りは、二、三〇名の青年男女が笠鉾を中心として列をなし、平鉾と古銭をたたきながら踊るものである。伝来時期は明らかではないが、伝承によると永保元年（一〇八一）の後三年の役で、御霊神社の祭神となった鎌倉権五郎景政が八幡太郎義家に従い、奥州清原一族の討伐での戦功により常陸四郡を賜り、鎌田の域にはいったときに、農民たちが新しい領主の凱旋を祝って歓迎のため鉾をたたいて踊ったのが発祥であるという。

仮にこの伝承のとおりだとすると、獅子舞よりはるかに古い時代からの芸能ということになるが、当地の平鉾踊りと同系統である石川郡玉川村竜崎の平鉾踊りが文保二年（一三一八）からと伝えられるほかは、同村北須釜の白鉾踊りが寛永十六年（一六三九）から、須賀川市上小山田の古寺山自奉楽が宝暦二年（一七五二）から、同市雨田の自奉楽が享保二年（一七一七）からと、いずれも江戸時代以降にはじまっている。こうしたことから、景政寺や御霊神社にまつわる鎌倉権五郎景政の伝説が、おそらく江戸時代以降に当地でおこなわれていた平鉾踊りと結びついたと考えられるが、平鉾踊り自体は江戸時代初頭からのものと思われ、後三年の役当時からおこなわれていたわけではないであろう。

役名と衣裳・道具

踊り手は、笠鉾一名と踊り子二、三〇名で、いずれも二〇歳から三〇歳くらいまでの青年である。笠鉾は男



【写真3】三城目平鉾踊り



【写真4】平鋏（表）



【写真5】平鋏（裏）



【写真6】天保銭

子があたるが、ほかは女子も加わる。衣裳は、袷に馬乗袴をはき、手甲、脚絆、白足袋、草鞋履きで、白鉢巻に白の両たすきをしめる。女子の袷は紫色のものを着る。笠鉾持ちだけは袷の尻を端折り、股引と中齒の高下駄をはく。また、笠鉾は長さ二メートルの竹に紅白の布を巻き、先端にヨシの穂と造花をさし、その下に行灯状の箱をつけて「五穀豊穰」などと書き、さらにその下に直径一・五メートルの竹の輪をつけ、周囲に幅四六寸の布をさげたものである。

踊り子は左手に平鋏、右手に天保銭を持つ。平鋏は金属の部分の色紙で飾り、その真ん中に三日月と太陽の模様をあしらっている。また、踊り子は竹を三本に割ってそれぞれに造花をつけた花を背負う。

囃子方は獅子舞と共通であるが、笛五名ほどと歌い手が三名ほどで、各自羽織袴で白扇子を持つ。

次第と演出

獅子舞と同様に、常宿の相楽家で衣裳を整え、「笠揃い」といってここで一庭舞った後、総区長、警護、獅子、囃子方などと行列を組んで、御霊神社、景政寺、澄江寺、城見寺など地区内各所を巡って踊り、最後に相楽家に戻って「笠抜き」となる。

演目は次のとおりである。

① ヒヤイヒヤイトロリ（笛からの名称）

笠鉾を先頭に、踊り子が一列になって獅子舞といれかわりに舞庭にはいり、輪になる（相楽家の庭では横一列）。踊り子の先頭を一鐘（いちかね）、最後尾を尻鐘（しつかね）という。

② 弓引き

笠鉾が踊り子の輪にはいる。踊り子は前かがみになり、右足をうしろに、左足を前にして左ひじを左足のひざにつけ、右手で弓をひき矢を放つような所作をする。

③ 三つ拍子

踊り子は立ちあがり、鉾を強く打ち、次に鉾を右にひき寄せ、さらに左足を折って中腰になり、鉾を左右に二回振り、うしろにさがる。

④ 潮来さ（歌詞からの名称）

鉾を右足と同時に前に突き出し、鉾を左右に振りながら左足でうしろにさがる。次に両手を大きく開き、さらに左足を踏むと同時に前かがみになって鉾をたたく。

⑤ 四つ拍子

鉾のみによる。

⑥ トオヒヤロヒヤラアロ

「弓引き」と同じ所作の後、左足を折り、鉾を腰に右手をひいては、前かがみになって鉾をたたくことを繰り返す。

⑦ しもべ

歌が終わってから、笠鉾を先頭に一列になって退場する。「しもべ」はしまいの意という。なお、「弓引き」と「潮来さ」の部分に、囃子方による歌がはいる。歌詞は次のとおりである。

弓引き

八溝通れば雨降りかかる 雨じゃないもの つよしちさまよ

潮来さ

潮来サ出島まこのよれ葉の真孤まこ 真孤さよらねば やれみも

よらぬ

よらぬ
そさまサ前髪取らしやるならば わしも取ります やれ

振り袖を

このうち、「潮来サ出島の」の部分は、茨城県潮来地方発祥の民謡「潮来出島」の「潮来出島の真孤のなかで あやめ咲くとはしほらしや」の一節とかかわりがあると思われる、後に江戸などで俗謡として広く歌われていたものが、平鉾踊りの歌詞に織り交ぜられたと思われる。

また、現在は歌われないが、この後に続く歌詞もある。歌詞はもともと口伝によっていたため、伝える人によって多少内容が異なるが、伝承団体である鎌倉会で書き残し伝えられている続きの部分は、次のようなものである。

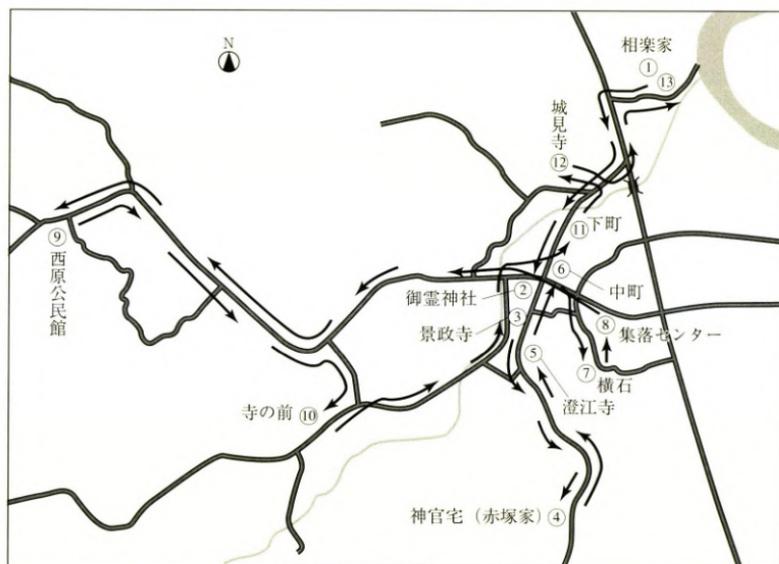
お江戸二丁目の糸屋の娘 姉の三七さんしち 妹の

二八にやち

二八ほしさに御良願ごりようがん かけた かけた良

願叶わぬ時にや

伊勢に七度ななど 熊野に三度さんど それでも



【図1】三城目獅子舞と平鉾踊りの移動経路（平成15年度）

御良願 叶わぬ時にや

前の小川にわが身を捨て 三十三しろの大蛇となりて

富士のお山を七まき八まき

「三七」とは二二歳のこと、「二八」とは一六歳のことである。なお、「大蛇となりて」といった歌詞について、故・相楽眞一は『屑篋第七集 千両箱』の中で、歌舞伎で名高い「娘道成寺」の清姫からつくられたものではないかと述べている。いずれにせよ、江戸時代の流行歌や歌舞伎などの物語の要素がとりこまれており、伊勢や熊野の参詣といった当時の人々の交流を偲ばせる。

なお、平鍛踊りは一庭踊るのに、およそ一〇分を要するが、踊り手の中の「一鐘」と「尻鐘」が号令役で、一つの踊りの区切りごとに一鐘が「うんさあ」と掛け声をかけ、尻鐘が「ひがよいとうとう」と号令をかけると、次の踊りに移行することになつており、この号令次第で長くも短くもなる。また、踊りが終りに近づくと、踊り手の中から、

しーもべ しもべ しまつてもいいころだ いいころだ いいころだ

〇〇あんにゃは笠鉦だ 〇〇あんにゃは一鐘だ

〇〇あんにゃは尻鐘だ 尻鐘だ 尻鐘だ (〇〇には名前がはいる)

というように、終りの号令を待つ掛け声が出される。一鐘は潮時を見計らつて「うんさあ」の号令をかけて踊りは終了する。この後、獅子舞に続いて「下り」の体形をつくり、次の舞庭へと移動する。

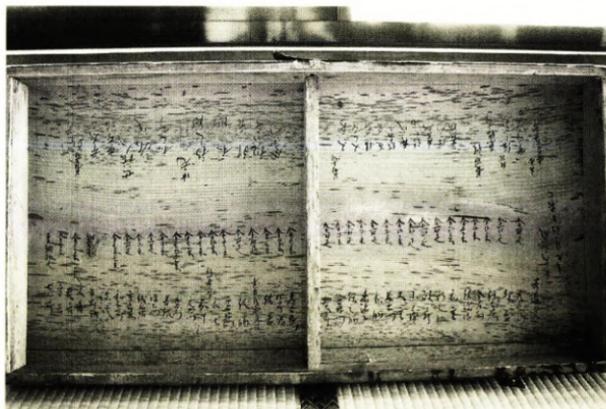
第三節 明新の獅子舞

獅子舞の由来

正確な開始時期は明らかではないが、獅子頭や衣裳・楽器などを保管する長持の蓋の裏書に、おそらく獅子頭を新調したときのものと思われる関係者や寄進者の連名と「文久三歳亥九月拾日書之」の記載があるため、江戸末期の文久三年（一八六三）より以前であることは確実である。なお、現在も残っている三体の獅子頭は当時からのもので、県内では珍しい張子^{はりこ}の獅子頭である。

明新の地名は、明治十九年（一八八六）に明岡村と明岡新田村が合併して、明新村となったことによる。明岡新田は、寛永年間（一六二四～四三）に中野村の二瓶権頭によって開発され、はじめは中野新田と称したが、享保年間（一七一六～三五）ごろから明岡新田とよばれるようになった（『白河風土記』）。獅子舞は明岡村の鎮守であった住吉神社の旧暦九月九日の祭礼に、一〇年あるいは二〇年に一度だけ奉納されてきたが、明治十九年の二村の合併後は住吉神社のほか、明岡新田村の鎮守であった大綿續神社にも奉納するようになったという。ただし、先の裏書に「新田若衆中」の寄進者の連名もあることから、江戸末期にはすでに二村合同による獅子舞であったとみられる。

獅子舞は、大正七年を最後にいったん中断してしまいが、第二次世界大戦後、地元の有志の間で中断した獅子舞を復活させよ



【写真7】明新獅子舞の道具類を納めた長持ちの蓋の裏書

うとの動きが起きた。獅子舞復活に尽力した有志の一人で、昭和五十八年の六五年ぶりの復活実現の立役者でもある藤井友治が、『毎日新聞』（昭和五十八年九月七日付）に寄せた手記に、当時のことを振り返って、次のように書いている。

今から三十余年も前のこと。当時、青年会役員で獅子舞の保存と伝承に若き情熱を燃やし、青年会員一丸となって練習に打ちこんだ。ところが折あしく、村では新生活運動が唱えられ、旧暦九月九日の祭例では時期が遅い、新暦の十月二日に統一しようと地区民で話し合いが持たれた。

しかし、「これまで通り」と「改正したい」との意見が対立。秋祭りが二回行われる事態となった。青年会では、意見が一本にまとまるまで静観しようとしているうち、われわれが青年会を退会する年齢になってしまい水のあわに終わってしまった。

このときの復活に向けた青年会の活動の中で、大正七年まで実際に獅子舞を演じていた方々から獅子舞の構成や踊り、囃子などを青年会員が習い、このことが後の復活の大きな力となった。その後の復活にいたる経緯についても、藤井友治が手記に綴っている。

当時から、すでに三十余年も経過、復活はなかなか困難であることは明白。今度も実現しなければ一笑にふされてしまう、という先入観があり簡単に掘り起しには気が進まなかった。

伝承する団体が無い。三人や五人の集まりではどうにもならない。地区一丸となって事にあたらなければ、成功する望みはない。当時の青年会は会員が少なく



【写真8】明新獅子舞（昭和58年 中央公民館前）

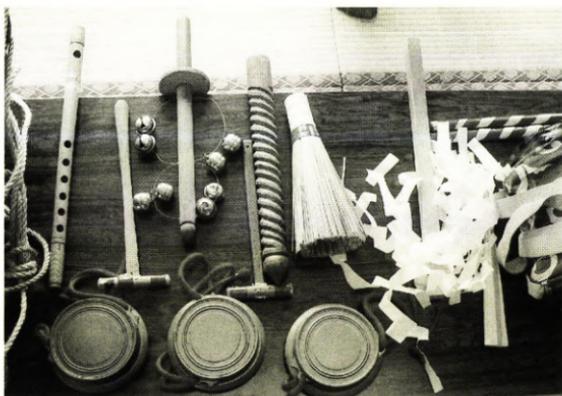
なり解散、自然消滅してしまっている。しかし、何とか掘り起こしたい。どうすればよいか……。思案をめぐらせた。

青年会当時、一緒に笛を吹き太鼓をたたいた仲間と相談した。何回も話し合った結果、地区全体に呼びかけて保存会をつくろう。それ以外に策がない。地区の役員にも相談して承認を受け「明新獅子舞保存会」が七月に結成されて、初めて本腰を入れ取り組むことになった。しかし、その後が大変だった。規約と予算書作成、資金調達などの仕事が毎晩続く。予算は幸いにして地区の七十戸全戸から予定の倍額を寄付していただいた。

こうして、昭和五十八年に、ようやく復活の動きが現実のものとなり、同年九月二十五日に開催された第五回矢吹町民俗芸能祭の中で公開され、実に六五年ぶりの復活を遂げたのである。この過程では、当時矢吹町中央公民館で町内の民俗芸能掘り起こし事業にとり組んでいた星圭之助の助言も大きな力となった。

明新の獅子舞は、翌五十九年の第六回矢吹町民俗芸能祭でも公開された。藤井友治によると、復活当初の五十八年には構成や形式が確定していない部分があったが、翌年にはほぼ確定したという。その後、住吉神社と大綿績神社の祭礼が新暦十月二日に近い土曜日または日曜日におこなわれるのにあわせ、ほぼ毎年獅子舞を奉納するようになった。

平成六年九月十一日に白河市民会館で開催された「うたと歴史のみちのく絵巻」(第三三回福島県民俗芸能大会など)にも出演したが、地区の児童数の減少などにより次第に実施が困難になり、平成十年十月四日の住吉神社・大綿績神社祭礼で奉納された後は再び中断してしまっている。た



【写真9】明新獅子舞の道具類(笛・鉦・鈴・すこすりなど)

だし、地区では条件さえ整えば再度復活できるように、獅子舞をビデオテープなどの記録にとどめ、獅子頭・衣裳・太鼓・棒ささら・鉦・笠鉦などの道具一式を地区集会所などに保管している。

役名と衣裳・道具

明新の獅子舞には、県内に伝わるほかの多くの獅子舞にはほとんどみられない特徴があり、近接する三城目の獅子舞と比較しても類似点が少なく、大変に貴重である。六五年におよぶ中断時期があったとはいえ、その間も、大正七年まで実際に獅子舞を演じていた古老の記憶をもとに青年会員らが復元にとり組んでいたことから、昭和五十八年の復活以降の獅子舞には中断前の内容がほぼ忠実に再現されていると考えてよいであろう。

獅子舞の踊り手は三名であるが、このほかに、すこすり三名、鉦切り数名が踊りに加わり、囃子方として太鼓二名、笛三名、鈴数名と、笠鉦一名がつき、さらに御神燈、大世話人、御幣持ち、御神酒持ちが各一名、提灯持ち数名が行列に加わる。

獅子は、太郎獅子と次郎獅子の雄獅子二名と雌獅子で、一〇代前半の男子があたる。獅子頭を被り、鼠色の筒袖の着物に野袴をはき、赤緑の白手甲、白足袋、草鞋履きで、それぞれ腰に鞆鼓をつける。

すこすりは小学校高学年くらいの主に女子があたり、鼠色の長袖の着物に黒の袖なしを着て、白足袋、麻草履をはき、水色の鉢巻をしめる。「すこ」は「摺鼓」と書くが、長さ三〇センチほどの棒ささらで、握る部分を除いて刻みがいっただホウの木の「親」と、竹の先を細く割った「子」をこする。

鉦切りも同年代の女子があたる。紫の着物に名古屋帯をしめ、赤緑の白手甲、白足袋に麻草履をはき、桃色の鉢巻をしめる。鉦は伏鉦で、木植でたたく。

囃子方は成人で、羽織袴の姿である。行列に加わる太鼓は、獅子の鞆鼓と区別して大太鼓とか桶太鼓という。笛は六孔である。笠鉦持ちも成人である。笠鉦は、高さ約二メートルで、先に籠をつけて小さな切り紙をいれ、その上に造花を二〇〇本ほどさす。行列の際に御神燈と大世話人に続くが、舞庭に立てて途中から踊りにも加わる。

次第と演目

祭礼当日は、宿としてゐる公民館に集まって準備をし、整うと

「笠揃い」として舞う。これより神社に向かい、境内で舞った

後、宿に帰って「笠抜き」となり、最後にもう一度舞って終了する。

構成は大きくは、宮上り、宮舞、笠鉦めぐり、宮下りの四つにわけられるが、さらに細かくは次の二〇の部分からなる。

- ① 宮上り 列を組み、参道を進む道中囃子。
- ② タコダン 同右。
- ③ さんざり 同右。
- ④ 宮廻り 社殿を三回巡る。
- ⑤ 参拝
- ⑥ 宮下り 神殿前から参道口で打ち終る。
- ⑦ さんざり
- ⑧ タコダン
- ⑨ 居眠り 獅子が横一列に、そのうしろにすこすりと鉦切りがやはり横一列に並んで正座し、前かがみとなって舞う。
- ⑩ ダンダン 獅子三匹、鉦切り、すこすり。
- ⑪ 太郎獅子 太郎獅子が座り、幣束と鈴をとった後立って舞う。
- ⑫ トートノメ 再び、全員で舞う。
- ⑬ 次郎獅子 次郎獅子が幣束と鈴の回りを巡った後、両手にとって舞う。



【写真10】明新獅子舞の笠鉦

⑭でんむくり 全員で舞う。

⑮雌獅子 雌獅子がすこすりと鉦切りの間を抜けて進み、位置を交換する。

⑯たんぜい すこすりと鉦切りが組になって踊る。

⑰相馬の
おんつあま 舞庭中央に笠鉦を立て、獅子、鉦切りが飛び跳ねるようにして踊る。

⑱水車 笠鉦を中心にして、輪をつくり、回りながら踊る。

⑲岡崎 笠鉦を中心にして獅子、鉦切り、すこすりが輪になって踊る。笠鉦

持ちは、笠鉦を振って紙切れを散らす。

⑳ダゴダン 輪になって舞った後退場する。

このように明新の獅子舞は、三匹の獅子にすこすりと鉦切りがからむ独特の構成を有している。また、途中から笠鉦が加わり、獅子、すこすり、鉦切りが笠鉦の回りを巡りながら踊るのも、他地域の獅子舞にはない大きな特徴である。踊りも素朴なものであり、旋律も比較的単調である。

こうした特徴がどの地方からの影響によるものか、どのような経路で伝えられたのかなどはまったくわかっていない。ただ、近接する三城目の獅子舞や、阿武隈川の対岸の石川郡内に伝わる三匹獅子舞の多くが、県内では中通り地方南部にだけ伝わる平鉦踊りと対になって踊られ、その中で笠鉦が踊りの中心になる場合が多いことから、明新では青年による平鉦踊りが演じられなにかわりに、子どもの獅子舞に笠鉦が加わるようになったとも考えられる。また、鉦が獅子舞の楽器に加わる例は珍しいが、白河地方に伝わる歌念仏でこれに似た鉦が使われることから、その影響によるものかと思われる。



【写真11】明新獅子頭

歌詞は、「相馬のおんつあま」から「岡崎」の間にはいる。

相馬のおんつあま 鱈桶たらづかついで サツサと寝かせろ ホイ ホイ ホイ

廻れ廻れ水車 早く廻んねど 堰や止まる 堰や止まる

廻りトーロの一株（もと） ススキようけれどうも

そこで雌獅子は 隠し捕られた 隠し捕られた

参り来て 此れのお宮を見申せば

四角四面で クサビが一つ クサビが一つ

ここに登場する「相馬のおんつあま」については、地元でも諸説あるが、相馬地方からきた魚の行商のことを歌いこんだものであろう。

第四節 念仏踊りと太鼓

念仏踊りには、死者の霊を弔うためにおこなわれるものが多いが、県南地方では、主に田植え終了後に、稲の生育に必要な日照を期待して太陽に念じるための念仏踊りが伝えられており、天道念仏などとよばれる。また、害虫を追い払って豊作を祈願する信仰もあり、虫送りとよばれ、かつては県南地方で広くおこなわれていた。

県南地方の天道念仏については、元禄年間（一六八八～一七〇四）からとか、関東から伝えられたなどの伝承があるが、確かなことは明らかではない。ただ、文化十一年（一八一四）の『奥州白川風俗問状答』六月の項に、

降りつづきたる時晴を祈るには、所の鎮守などへ神主修験等参り祈念いたし、農人は村限り大勢集り、朝日の出るより日の入まで、鉦太鼓にて足を休めず、念仏を申ながら立通しにて、或は輪にめぐり等して天道を祈り申候、是を天道念仏と申候、実に田舎の風俗に御座候

とあり、このころには白河領内で広くおこなわれていたようである。明治以降、相ついで廃絶し、現在では矢吹町大和久などのほか、白河市関辺や、西白河郡西郷村上羽太などに残るのみとなっている。

一 大和久の天道念仏踊り

由来と伝承 大和久の天道念仏踊りは、旧暦六月十五日の日吉神社の祭礼で、宵祭りの晩に同神社境内でおこなわれる。また、同神社に合祀される愛宕神社の六月二十四日の祭礼でも、宵祭りの晩におこなわれる。

第二次世界大戦後しばらくおこなわれた後に中断していたが、昭和五十年代に矢吹町教育委員会を中心に進められた民俗芸能掘り起こし事業の中で復活の動きが起き、昭和五十四年に保存会を結成して再興された。この年、第一回矢吹町ふるさと民俗芸能のつどいに出演し、その後、昭和五十六年の第三一回福島県民俗芸能大会（石川郡平田村）、昭和五十九年の第二六回北海道・東北ブロック民俗芸能大会（山形県米沢市）にも出演した。

役名と衣裳・道具 踊り手は一〇名から二〇名、囃子方として笛が二、三名、締太鼓三、四名、歌い手が数名による。いずれも男性で、浴衣を着て尻を端折り、裸足となる。かつては青年会員が禪ひとつで踊ったという。太鼓は首

から吊るして打つ。

次第と構成

六月十四日、二十三日とも、日中に準備を整える。舞庭の中央には檜えの若木で、高さ二メートルほどの方形の神棚を設け、注連縄をはって提灯をさげ、米、キュウリなどを供える。一同は夕食をすませて神社に集まり、準備

ができること、踊り手は神棚を中心にして輪をつくり、踊りは始める。

種目は、次のとおりである。

① 婦命頂礼きみもちょうらい

「婦命灯来」などとも書く。手ぬぐいを右手に持ち、上下に振りながらゆつくり踊る。

② はねっこ踊り

「とりつけ」とか「しゃもつけ」ともいい、当地方の盆踊りの一種。

③ 上方下り

「婦命頂礼」に同じ。

④ はねっこ踊り

同右

⑤ 小夜の中山

前鉢巻をする。手を交互に頬杖ほつえをするようにあけては、足を交互に前に出して手拍子を打つ。

⑥ はねっこ踊り

同右

「婦命頂礼」、「上方下り」、「小夜の中山」は念仏の歌にあわせて踊るテンポの遅い踊りで、それぞれ次の歌詞がつく。

婦命頂礼

婦命頂礼天竺の〔南無阿弥陀仏〕(以下同じ)

神の社の建つ時は

本田河原に木とりして 糸屋の裏のしちく竹

七節揃えて八重たるき そのうら竹をおしほこに

桂男が梁をしめ 十五夜お月はかやを上げ



【写真12】大和久天道念仏踊り(婦命頂礼)(昭和56年 善郷小体育館)

二十三夜がおふきやる 三社の神が屋刈りして
ふいて納めて見申せば これこそ神の社なり
にっしん成仏有難き

上方下り

上方下りの十七は 今年初めて田を作る

今年はいい年当たり年 丈が七尺穂が五尺

いかなる駒にも八穂一駄 八穂で八石とれるなら

これのお瀬戸に蔵を建て 蔵のお番は誰と誰

一に大黒 二に恵比須 三に毘沙門福の神

にっしん成仏有難き

小夜の中山

小夜の中山通る時 身持ち女と道連れ

一里離れたや二里離れた 三里離れたや曲がり目で

こゝでなびくと袖を引く こゝでなびくも易すけれど

お前も似合いの妻を持ち わたしも似合いの殿を持つ

似合い似合いでなびかれぬ 余り言葉のにくいさに

腰なる刀に手をかけて 肩より腰とけさがけに

腰よりすそと捨て切りに 刀の切り口子が生まる

そこへ和尚が立ち寄りて これも和尚の道なれば



【写真13】大和久天道念仏踊り（はねっこ踊り）（昭和56年 善郷小体育館）

下なる清水でとりあげて 上なる清水で身を清め

衣の片袖いなぎとし 切り口太郎と名をつけて

寺の門前にあつらいる にっしん成仏有難き

以上の歌詞の一句ずつを、南無阿弥陀仏の念仏と交互に唱える。

はねっこ踊りは、「しいっ」「しいっ」と掛け声をかけながら、踊りのテンポを次第に早め、ついでいけなくなった者から抜けていき、一人になると止める。

二 根宿の天王祭太鼓

由来と伝承

根宿の八幡神社境内で、七月十四日の夜におこなわれるもので、境内に祀られる天王社に奉納される。昭和四十年までは旧暦六月十四日であった。

悪魔^は祓いや五穀豊穡を祈ってははじめられたと伝えられるのみで、起源や伝承は不詳だが、少なくとも明治二十年ごろにはおこなわれていたという。なお、「原宿の二十三夜講念仏太鼓」とは歌詞、太鼓の打法ともに類似しており、「大和久の天道念仏踊り」とも太鼓の打法は異なるが歌詞は類似している。また、西白河郡中島村の「小針のさくらまち太鼓」は太鼓のみで演じるが、この太鼓も同じ流れと思われる。小針の記録碑には、嘉永三年（一八五〇）の銘があるので、根宿でもおそらくこれと近い時期からおこなわれていたと考えられる。

今日までは途切れることなくおこなわれている。矢吹町民俗芸能祭でも、昭和五十六年の第三回と平成五年の第一五回（最終）で演じられたほか、昭和五十九年十月二十八日の第三四回福島県民俗芸能大会、平成六年十月二日に矢吹町文化センターで開催された第三九回福島県民俗芸能大会にも出演している。また、平成六年四月十六日には東京の国立劇場でおこなわれた「念

仏と太鼓のリズム」にも出演した。

役名と衣裳・道具

太鼓打ち五、六名と歌い手一〇名前後による。いずれも青年会員で、浴衣の片肌を脱いでへこ帯をしめ、尻を端折り、手ぬぐいの鉢巻をする。なお、歌は二五歳以上の中老も手伝うならわしになっている。また、種目のうち「太鼓」は年長者が、「念仏」は年少者が打つことが多いという。

会員は高校を卒業した一八歳から三五歳くらいまでだが、近年はそれ以上の年齢の人も加わる。かつては二五歳くらいまでであったという。役員には会長、副会長各一名、幹事四名をおいている。師匠には年長者の中老があたる。

次第と演目

祭日には、天王社にろうそく三本を灯し、酒、塩、キュウリなどの供物が多数供えられる。境内には、約二間四方に高さ三、四メートルほどの青竹を立てて、注連縄を巡らし、ヒバの小枝をさげる。注連縄で仕切られた舞庭の真ん中にバケツをおき、その中にはちを何本か用意しておく。

演じ手は、首からさげた太鼓を打つ。午後七時ごろから、まず一名が「寄せ太鼓」を打ち、続いて数人が注連縄の中にはいて太鼓を打ちはじめ、休むことなく交代しながら太鼓を打ち続ける。合間に歌い手が外に立って「念仏」の歌詞を歌う。

「太鼓」には四種類以上の打法があり、それを繰り返す。「念仏」は「はいなむ」と「地言」、「おやなむ」と「地言」の組みあわせである。「はいなむ」と「おやなむ」は歌い出しの言葉からきた名号である。それぞれの歌詞は、次のとおりである。

はいなむ

ハイ南無阿弥ハイ陀ヨ仏サ ヨホンガホイ

地言

神の社の建つ時は ごんだが浦に木取りして 桂男が梁を引く

糸屋がうらのしちく竹 七節揃えてやお垂木

そのうらうらを押しばこに 二十三夜に夜刈りして

ふいて納めて見申せば これこそ神の社なり

御祈禱念仏 南無阿弥陀(仏)

おやなむ

オヤ南無阿弥陀ノサヨ仏 八南無阿弥陀イ

地言

上方下りの十七は 今年初めて地をつくり

できもできたよ万作に 丈は七尺穂は五尺

いかなる穂までも八穂一駄 八穂で八石とれるなら

これがお背戸に蔵を建て 蔵の番人誰がする

一に大黒二に恵比須 三に毘沙門福の神

御祈禱念仏 南無阿弥陀(仏)

三 原宿の二十三夜講念仏太鼓

由来と伝承

原宿の二十三夜講念仏太鼓は、正福寺にある二十三夜石塔の前で、旧暦七月二十三日(後に新暦七月二十三日)の夜におこなわれる。太鼓のたたき方やリズム、「はいなむ」や「帰命頂礼」などの歌詞が、根宿の天王祭太鼓や大和久の天道念仏と似ており、芸能としての系統はこれらと同一とみられる。

二十三夜講とは、十三夜、十七夜、十八夜などと同じく月待ち行事の一つであり、単に「三夜講」とか「オサンヤサン」ともいって、本来は女性の安産祈願の祭りである。また、養蚕守護の信仰や、蓄財の信仰(金に不自由しない)もある。しかし、原



【写真14】根宿天王祭太鼓

宿の二十三夜講は、女性のみでなく集落全体でおこなわれる行事であり、特に青年が主体となって念仏太鼓の奉納がおこなわれる。すでに第二次世界大戦前から、青年主催の行事となっている。

本来は女性だけの祭りであった二十三夜講に、青年たちによる念仏太鼓が加わるようになったのは、隣の根宿ではほぼ同じ時期におこなわれる天王祭太鼓の影響と考えられる。それがいつごろからはじめられたかなどは定かでないが、太鼓のたたき方や歌詞は、根宿の天王祭太鼓とほとんど同じであるので、比較的新しい時代のことと考えられる。

役名と衣裳・道具

青年会員は祭りの数週間前から練習をはじめめる。新入会員も先輩からの手ほどきを受けて当日までには一人前のばち

さばきを習得するものという。太鼓をたたく青年たちは浴衣姿で、鉢巻をしめ、草履をはき、太鼓を肩からひもで腰にさげる。四人の太鼓打ちのほか、外側で念仏のかけあいの中老が加わる。

次第と演目

二十三夜講では本尊の大勢至菩薩の掛け軸をかけ、これと境内の二十三夜供養塔に、キュウリ、米、酒などの供物が供えられる。

まず法印（僧侶）が祈祷し、その後、二十三夜供養碑の前で、念仏太鼓が披露される。根宿の天王祭太鼓などと異なり、青竹を四方に立てて注連縄をはるといったことはしない。四人の太鼓打ちが輪になり、太鼓を打ちながら少しずつ左回りに移動する。激しく太鼓を打つ部分と、その合間に念仏を唱えながらゆっくりしたく部分とがある。

念仏太鼓が終ると、御神酒を酌み交わす。以前は境内がそのまま盆踊り会場となり、参詣者一同が踊りながら夜が更けるまで楽しんだという。



【写真15】原宿二十三夜講念仏太鼓

なお、隣接する寺内地区でも二十四夜の月待ち行事があったが、現在はおこなわれていない。

四 田内の天王祭太鼓

由来と伝承

田内の熊野神社に合祀ゴウジされる天王社（通称「天王様」）の旧暦六月十五日の祭礼にあわせ、その前日から二日間にわたって奉納された。現在は、新暦六月十四日か、十五日の昼間に一日だけおこなわれることが多い。根宿の天王祭太鼓や大和久の天道念仏などと太鼓のたたき方やリズムがよく似ている。おそらくは江戸時代からおこなわれていたと思われる。

「稲虫送り」とか「菓送り」ともい、稲が生長する夏場に、稲に病害虫がつかないように祈る行事である。なお、田内の天王様は、矢吹や根宿の天王様とは異なり、キュウリを供え交換する伝承はない。

役名と衣裳・道具

田内の青年会員によっておこなわれる。青年会はもとは一五歳の学校卒業と同時に加入し、二五歳くらいまで、長男か二、三男かは不問であった。太鼓のたたき手は数名で、歌はいらない。衣裳は特に定まっていらないが、以前は浴衣を着たようである。太鼓は大きさの異なる三つの太鼓を用いる。なお、古くは笛や鉦も加わりにぎやかだったといわれる。

次第と演目・構成

十四日に青年会の若者らが神社に集まって準備をはじめ。以前は十三日からはじめたようである。神社の境内に、太い青竹を真ん中に立て、その周りに一〇本の竹をさして竹の簾すだをつくり、そこに注連繩をは



【写真16】田内天王祭太鼓

り巡らして、短冊をさげる。竹の簾の準備が整うと、拝殿に社寺総代、氏子、青年がはいり神職が太鼓を打ってお祓いをする。その後、三人の青年が境内の杉の木に結わえつけた大太鼓、太鼓、小太鼓を打つ。にぎやかに祭太鼓が奉納される間に、境内の竹の簾を一人の青年たちが神社脇の林に移す。これを「短冊送り」といい、稲虫送りとかわりがあると考えられる。その後、交替で翌朝まで太鼓を打ち続けたというが、現在は一日で終わっている。

打ち方は以前は五種類あったが、現在は一種類のみ伝承されている。また、供物のおこわをカキの葉に包んで、護符として地区の人々に配っていた。古くは「お天念仏」もあわせておこなわれたということが詳細は不明である。

五 三城目の歌念仏踊り

花念仏ともいい、社寺の縁日をはじめ、農閑期に念仏講中が民家に集まっておこなわれる祈祷念仏である。白河市萱根根田に伝わる安珍歌念仏踊りなどと同系統である。

歌い手は念仏を唱える「おや（音頭）」と、伏鉦ふせかねなどをたたきながら「南無阿弥陀仏」と唱える「うけ」にわかれる。以前は太鼓打ちがいたと思われるが、現在は火箸や木の棒で机などをたたいて調子をとる。

踊り手の人数は一定ではないが、扇子を持ち、手ぬぐいを被り、夏は浴衣に半巾はんちゆう帯、冬は袷に白足袋をはく。また、歌の登場人物にあわせた衣裳を着て踊ることもある。



【写真17】三城目念仏踊り（昭和56年 善郷小体育館）

種目には「七福神」「あたご様」「さじながし」「字あまり」「忠臣蔵」などがあり、いずれもオヤ、シヘン、ナガシの三節からなり、オヤとシヘンは扇子を持ち、ナガシは素手で盆踊り調のにぎやかな手踊りとなる。

六 松倉の相撲太鼓

松倉は昔から相撲が盛んだったといい、近津神社（かぶと大明神）に合祀される天王社の六月十五日の祭礼におこなわれてきた。

前日の十四日夜と十五日早朝に、境内で相撲がおこなわれる先触れとして、杉の木に結わえつけた太鼓を若者数人でたたき、まず、「神事太鼓」をはじめに一回、続いて「相撲太鼓」を三回打ち、最後に再び「神事太鼓」を一回たたいて終りとする。

第五節 祭り囃子と祝福芸

一 矢吹の祭り囃子

由来と伝承 毎年十月第一土、日曜日（もとは九月二十八〜三十日、後に十月一日〜三日）におこなわれる矢吹神社の秋祭り

で、矢吹の本通りを練り歩く屋台（山車だしともいう）ののって演奏される。開始時期や伝来などは不詳であるが、おそらく江戸時代末期であろう。伝えられる曲目などから、白河市の鹿島神社の祭礼でおこなわれる祭り囃子と同じ系統と考え

られる。

古くは上町（中町）と下町（本町）にわかれ、両町の屋台がきそいあっていたが、第二次世界大戦後は一区と二区の各自治会
で継承された。二区は昭和三十年を最後にいったん途絶えていたが、地区民の努力により昭和六十年に復活した。一区は多くの
障害をのりこえて今日までひ
き継がれている。

役名と衣裳・道具
屋台に

は大太

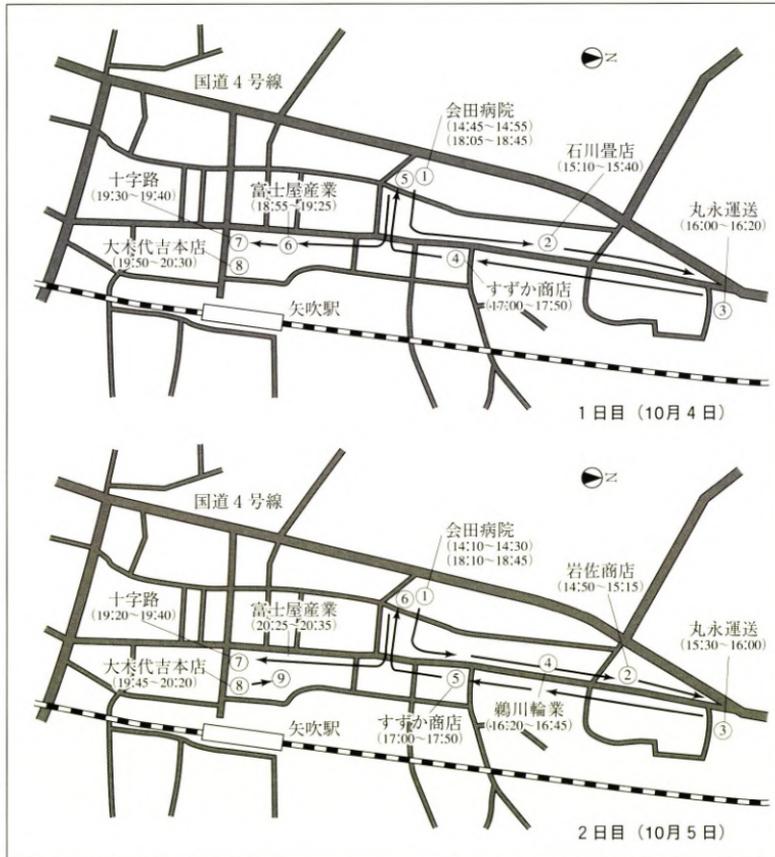
鼓一個と小太鼓がとりつづら
れ、大太鼓は若連が、小太鼓
は町内の小学六年生の女子数
名がたたく。女の子は揃いの
赤い着物に紫の袴はかま、黄色の
たすきをつけ、化粧をしての
りこむ。ほかに笛・鉦かねが加わ
り、これらは若連が担当する。
なお、二区の屋台は万延元
年（一八六〇）につくられた
という歴史のある豪華なもの
で、高さ五・二メートル、幅



【写真18】一区の屋台



【写真19】二区の屋台



【図2】二区の屋台の巡行経路 (平成15年度)

四・七メートル、長さ七・八メートルと規模が大きい。四つの車輪がつき、太い縄で子どもを中心に五〇人ほどでひき回す。また方向転換する際には、台車部分を固定したまま上部だけ回転させることが可能である。

一区の屋台は、高さ三・五メートル、幅一・八メートル、長さ四メートルと、二区より小ぶりだが、やはり四輪で、綱でひく形式のものである。

次第と演目・構成 曲目は、

一区では「お囃子(ばかばやし)」「矢車」「七変返し」の三つ、二区では「二編返し」「七変化」「小転」「ばかばやし」の四つが伝えられている。

平成十五年十月四日、五日の二区の屋台運行は、二日間とも午後二時以降から九時ごろまで、図2にある順路でおこなわれた。要所ごとに屋台を止めて、舞台上で囃子や太鼓の演奏、カラオケなどの演奏もおこなわれた。

二 中畑の会津万歳

由来と伝承

万歳は、正月中に各家を回り、玄関先や座敷の神棚の前などで祝福の口上を述べ、歌い踊る「門付芸」の一種である。県南地方でも、昭和のはじめまで会津地方から万歳師がきて各家を回っていた。中畑松房の故・水戸守伊が、湖南（郡山市湖南町）安佐野の万歳師から習い受け、相方役の水戸繁之助とともに受け継いできた。ただし、門付はしなかったという。

役名と衣裳・道具

太夫と才蔵の二人一組になってかけあいでおこなわれる。太夫は烏帽子に直垂、袴、白足袋、才蔵は頭巾に色物の各袖の半纏を着て、たっつけ袴（またはモンペ）、白足袋をはく。また、扇子と鼓を持つ。

次第と演目・構成

このうち、「年始万歳」と「七福神」が基本であるが、「古峰様」は火伏せ祈願、「屋立万歳」は新築祝いの家といったように、各家の依頼に応じてほかの演目も選ぶ。いずれの場合も主に太夫が口上を述べ、才蔵がそれに合いの手をいれる。最初は座って、太夫が鼓を縦に持って謡いあげる「天王出し」があり、続いて鼓を才蔵に渡してから祝言となる。後半は「踊り」で、太夫、才蔵ともに立って踊り、「御門開き」や「門松踊り」などの演目をおこなう。このとき、才蔵は鼓を祝い物に見立てるなどして、かなりくだけたしぐさをする。最後は座って納め口上がある。

以下は、水戸守伊が書き綴った各演目の口上である（表記は原文のまま）。

年始万歳

(天王出し)

へそもく明けてめでたいあらたまの

かわらぬものには桂木や

松に千歳の御代の春 明けて登場のめでたさよ

へ門に門松祝いの松よ おん家に立つのが五七松

へ七五三なるおん注連縄を ご家内繁昌と張らわれる

へきすいもあらたにおわしませる

いざなぎ いざなみ おんみこと

へこの二柱のおん神さまは 天あめより降らせたまいるは

へ明けてめでたやあらたまの 年とる始めのあしたには

へ水も若寄る木の芽も栄ゆ 栄えて通るはしきりんの

へ祝いものとはおんめも喜ぶ 候いけるが

今日は会津のご万才マンサイ(歳)

へ御家も目出度くお祝い申す 千代には千代とのご万才マンサイ

七福神

そもく鶴は千年の名鳥なり 亀万年の千代むすぶ

鶴亀松竹よりまずはこの家に



【写真20】中畑の会津万歳 (平成15年)

七福神の宝舟をは引き寄せて

家内安全商売繁昌と祝い奏し奉る 千代には千代とのご万才（マデ）

へしき初め着初めは祝い初め 商売初めもよろづよし

へご家内ご寿命ほど長き世に とうのねふりもみなめざめ

へことにこの家のめでたさには 唐木造りの舟をはぐ

へ唐木造りに祭り込む神は 七福神が祭り込まれ

へ布袋が帆柱押し立てる 福祿寿が帆を上げる

へ帆印何よとよく見てやれば 宝という字を染め抜かれ

へ上には鶴が舞い遊び 下には亀が水遊ぶ

へ鶴と亀とが遊ぶ庭 ご家内繁昌と舞い遊ぶ

へまづはおん家の悪魔を払い 千代には千代とのご万才（マデ）

御門開き踊（鶴亀踊）

太夫 万才（マデ）楽を祝うて 千秋万世とはまいり栄えたんもうなり

これよりだんだん旦那様のご身内の（コリヤ）増すところ

（コリヤ）

よくもよくもお祝い申せな才（マデ）

才（マデ）三 アアありがた たまげた 千歳万才（マデ）な

太夫 西が三十三番には



【写真21】中畑の会津万歳（平成15年）

才三 東も三十三番な

太夫 丁度や合はせて

才三 六十な

太夫 六ヶ国のなりこの舞がはんじまれば

才三 ソーラワーズ 太平な

太夫 太平な京都に

才三 のんぼりて

太夫 紫宸殿の御門に（コリヤ）開かず

才三 御門かな

太夫 四方に

才三 開くよ

太夫 扉の音も キンキラリン（キリリーな）

鶴の声にも（キリリーな）

パツとこそ開いたら 才三らめでたいところ 唯し込んでまいれ

才三 アラキタ これわい サツテコソ

太夫 御門なんでおっしゃってんな

才三 太夫様な

太夫 がいな御門の（開くよ）

はだかる様で ごんざり申すか これわい

太夫 これ様の（ご身上）去年より 十軒口も（カラリー）

太夫 カラリナカット おっぱだかつてな これわい

太夫 錢だか金だか（ヒヨッタワラ）一時に（抱え込んで）

春は珍重 おめでたいと 祝うてんな（太夫様な）

東方には とんね倉（ムックリシヨと立ったぞ）

西方には（酒蔵）ムックリシヨ また立った

おん中に立つたるは 毘沙門天のかね倉も ガラリシヨど立つて

なお当年の暮れには 千人や万人の客来を招く 下上榮えて

へ 五万の長者とまつられたるが まことにめでとう候いける

門松踊り

太夫 それにも才三統けろ

才三 なにが太夫様続いた

太夫 お正月のめでたいところ 囃し込んでまいれ

才三 お正月とおっしゃってんな 太夫様な

太夫 門には門松

才三 むっくりしよと立ったぞ

太夫 おぬいどの松とな 高砂の松とな

住吉の松とな ねじりよって ぶつつけよって

そうれかかふん　　そうれかかふん

ふんぐらふんと　　松の根元を見たればんな　　太夫様な

まことにめでたい松茸　　そつちの隅にもむつくりしよ

こつちの隅にもむつくりしよ　　むつくりしよつこり　　五六本

せつしよしてござつてんな　　太夫様な

松茸と申すのは　　味もよければなりこもいい

ご身上のまさるときには　　元の方が小太くなつて

先の方がびらつとこそ　　末広がつて

これも珍重おめでたいな　　太夫様な

東方にはとね倉　　むつくりしよと立つたぞ

西方には酒倉も　　むつくりしよとまた立つた

古峯様

そもく　　祀り奉つる　　御家内安全

御商売繁昌と　　この家に古峯様を祈念奏し奉つる

へそもく　　由来を尋ぬれば

古峯様と申する神は

悪魔払いの神なりて国は下野しも野下都賀郡

二荒山の麓にて　　神の庵をむすばれる

鎮座ましますその神は　　日本武尊の御尊

表は火臥の犬天狗　　お裏は厄除け小天狗

この神信心する人々は

火難盗難八九の難　　まぬがせ給いと守る神

御家内繁昌と祝はれまして　　まことにめでとう候へける

屋立万才（柱立祝）

暦と方角 見てやれば

今日はみずのえ（壬）辰の日なれば

柱立ておば致さんと

屋根のしるしを見てやれば

氷の柱に 水の屋根

数多の人の 手をかりて

一本の柱は 一の宮立ち

あんば 杉田（岩城近津）の大明神

二本の柱は 錦の巻物

着せども尽きせぬ 守り神

三本の柱は 榊の明神

吞めども尽きせぬ 守り神

四本の柱は 四子天王

四方固めの 守り神

五本の柱は 牛頭天王

五穀を授ける 守り神

六本の柱は 奥州仙台

塩釜大社の 大明神

七本の柱は 七福神

宝を授ける 守り神

八本の柱は はんばすかんな（鉦）

弘法大師の お作なり

九本の柱は 熊野の権現

びやっこの宮立ち是なり

十本の柱は 十善万上

位高倉 大名神

十一本の柱は 十一面観世音

子孫を授けて守る神

十二本の柱は 十二ヶ月の

悪魔を払う 守り神

十三本の柱と 三十六本の

柱を添えて 押し立てる

矢羽を鬼門に 向けられて

おさ（箴）に麻に櫛

子孫繁昌と 下げられる

家内和合の杵も 上げ

上げし鏡は 長押なげしの床に

棟上げ音頭の 御祝

おつき目出度く 末広く

年徳神

そもく天に日月地にげんろんの神々を押し奉つる

中に立つたるは十二ヶ月の守神

年徳神を祈念奏したてまつる

へオヤソウトモ

そもく由来をたづぬれば年徳神と申するは

天に輝やく星の内 七耀九耀のその中に

日曜星と申するは さかむにこうていゆう王の

はしようじんは母君の手なづち長者のおん后うしろ

稲田姫と申せしが これより西国肥後の国

岩国山いわくにの麓もとにて 柴いの庵い引きむすび

年徳神献たまぜられ 十二ヶ月つぎの守神

妹背いもせの語らい おん神代

これより奥をば 拝すれば 峯より流るる滝の水

その川下に住む人は養老水と名づけられ

ますく繁昌とお喜び

まことに目出度の そうらい

まづ正月の元日に おん若水となぞらへて

さわらぬ手桶を取り出だし 黄金のひ杓を手に持たれ

一桶汲めば千杯の 二桶汲めば万杯の

幾万杯も変りなく 呑めば甘露の心地する

年神様にと供えられ 御家内様も召し上がる

この水飲んだる皆々様は

年徳神のごい徳にて十二ヶ月も

なに障りなく守らせ給う

年徳神のおん祝い

千代には千代とのご万才とう

伝承 水戸守伊

三 神田の田うない踊り・相撲踊り

神田の田うない踊りは、正月十一日の朝、数人が鍬を持ち、籠を背負い家々を訪ねて庭先で歌にあわせて踊るもので、万歳などと同じ門付芸である。踊っている間に、一人は二個の餅をもらい一個を籠の中からお返しし、次の家へと向かう。

いい春になりやした 明きの方から田うないにさやした

ひと鍬ざっくりしよ ふた鍬ざっくりしよ

みつつ鍬めの鍬さきで 金銀茶釜を掘り出した

あーめでたいめでたい めでたいな

ダンナさんが金カンジヨ オツカミさんは札カンジヨ

ざっくりざっくり ざっくりしよ

豊作だ万作だ お米がたんととれそうだ

四東三把で五斗八升 ざっくりざっくりうないましよ

同じく神田に伝えられていた相撲甚句すもうじんくを元歌にして、婦人たちが農閑期の湯浴ゆあみやお祝いの席などで、数人から十数人で踊ったものである。肌着にまわし、前かけ姿で相撲とりが四股しこを踏むような動作が加わる。



【写真22】神田の相撲踊り練習（昭和57年）

第六節 盆踊りと民謡

一 盆踊りと盆唄

県南地方では、広く「アレサ」の盆踊りが流布しているが、町内に古くからおこなわれる盆踊りもその系統である。

このうち、矢吹では太鼓は四個で、四隅の柱に結わえつける桶太鼓であり、そのほかに笛、音頭とりがつく。昭和六十年から二区東子ども会育成会が中心となり、小学生に太鼓打ちと音頭とり、踊りを継承しようと、二区の古老たちが指導し、現在でも盆踊り大会が開催されている。

田内では古くから「ハアーヨーホイヤー」調の盆唄が歌われ、横笛三人、桶太鼓二人、宮太鼓一人、平太鼓一人と音頭一人によるにぎやかな囃子が奏される。

根宿の盆踊りは「ホイヤー」調の盆唄の後「山唄」、最後に「はねっこ踊り」となる。「山唄」は「草刈唄」ともいい、かつて田植えあがりから夏の終りまで、馬の飼料とするため草刈場にいった帰りで男女がかけあいながら歌うものであったという。「はねっこ踊り」は、いわき地方から県南・県中地方にかけて広くおこなわれるもので、盆踊りの最後に踊られることが多く、大変躍動的な踊りである。歌詞は即興も加わり各種ある。



【写真23】三神盆踊り（三城日学校山）

根宿の盆唄

ホイヤー ハーヨーホイヤー ド (ハ ヤッシヨ ヤッシヨ ヤッシヨド)

太鼓しつかどぶぜ ヤーレー (コラヤッシヨ)

音頭とりやこわいよド (ア ヤッシヨ ヤッシヨ ヤッシヨド)

下で踊る子は ヤーレノーヨッサー なおこわいヨ (コラ ヤッシヨ ヤッシヨ ヤッシヨド)

親の意見と むすびの花は 千に一つの むだがない

いくら不思議だつて にわとりはだし なぜに蛙は まるはだか

川の向かい側に なじみをもては きりし雨でも 気にかかる

踊り踊りたい この子がじゃまだ この子すてても 踊りたい

今年や豊年だよ 穂に穂が咲いて 道の小草にも 米がなる

(福島県教育委員会編・刊「福島県の民謡―第三回福島県民謡まつり記録」昭和五十八年 二二・二三頁)

山唄(草刈唄)

エーヤーハー

朝の出掛けに (ホー) どの山見ても (ア チョーイ チョイド)

霧のかからぬヨ 山はない (ア チョーイ チョイド)

朝の草刈り どこで刈るおせな どこで刈るやら あてがない

草刈り遅くとも 東見ておくれ 遅い早いは 束による

ほれたほれたよ 川端柳 水に流れで 根がほれた

思うて通えば 千里も一里 逢わず帰れば また千里
 畑に地しばり 青田にびるも 家にままかか なけりやよい
 お月様でも 夜遊びなさる わたしの夜遊び 無理じゃない

はねっこ踊り

(ア 二一の三ヨト)

ヤーレナー 入れておくれよマータ (ア マータ) かいくてならぬ

私ひとりか キヨチャンネ (ア キヨチャンネ) ヤレサナー かやの外

してもしたがる十七、八は 親もさせたがる 針仕事

声で聞きとれ 姿でみとれ 声や姿で みとられぬ

親の意見と なすびの花は 千に一つの 無駄はない

朝の出掛けに もとめたなじみ 石にけつまずいて 黒なじみ

お月様でも 夜遊びなさる わしの夜遊び 無理はない

踊りすけべで 会津まで来たが 踊り踊らねで 帰らりよか

からすの田の畔で つぶの殻つづく おらもわが家さ行って かがアつづく

前の姉さまの ほっかぶりがうそだ 直してあげたい 顔見たい

これでお別れ お名残り惜しい 雨の十日も 降ればよい

「はねっこ踊り」は中畑にも伝えられていた。

中畑のはねっこ踊り唄

ヤーレナ親の意見で やめやめしたら

花も咲くまい 実もならぬ

ほれて見るせいも 八重歯の金歯

たらず二本棒 巻たばこ

信州信濃の 支那そばよりも

可愛いお前さんの そばがよい

(福島県教育委員会編・刊『福島県の民謡―第一回福島県民謡まつり記録』昭和五十六年 一一六頁)

二 根宿のごんたん踊り

中畑の「根宿のごんたん踊り」は、大正末期から昭和初期にかけて、京浜・中京などの紡績工場へ働きに出た女工たちの生の声、手踊りで踊られるようになったものとされる。昭和五十九年に町の民俗芸能の掘り起こし事業により六〇年ぶりに復活し、同年の民俗芸能祭で発表された。

「ごんたん」の意味について、当時のバツタン機からくるものとの説と、数え歌の調子あわせとの説がある。歌詞は一番から十番まであり、当時の女工たちが劣悪な条件のもとで昼夜を問わず作業にあたった様子がうかがえる。

(一番)

一つのごんたんやるがまた 人も知らない山の中

きて見りや駿河の富士紡績 音に聞こえし滝の音（キタシヨウ）

（二番）

二つのごんたんやるがまた ふた親そろつてありながら

こんな会社で苦勞する ほんにふた親なけりやよい（キタシヨウ）

（三番）

三つのごんたんやるがまた みなさん駿河にくる時は

お金を残せと言われてきたが なぜかお金が残らない（キタシヨウ）

（四番）

四つのごんたんやるがまた 夜も寝ないで夜業する

長い寿命も短くなる 心ほそいじゃないかいな（キタシヨウ）

（五番）

五つのごんたんやるがまた いつか田舎のふた親様に

つらい会社の物語 共に泣いたり泣かせたり

（六番）

六つのごんたんやるがまた 無理な会社じゃなければ

規則でたてたるこの会社 規則やぶれば罰となる

（七番）

七つのごんたんやるがまた 中のしごとはよいけれど

時々ゆりだす大地震 命がけではないかいな

一二歳から二三歳まで女工として働いたという。当時の女工の勤務は、日曜日以外の週六日で、朝六時から夕方六時まで、二交代制で、三度の食事も満足に与えられなかったという。月給はすべて実家に送金されるが、実家で会社から前借りした借金と相殺されるために何年働いても貯金はなかったという。食事は玄米、ムギのご飯に漬物と味噌汁だけで、月に二回は魚の半身が出る程度であったという。

三 その他の民謡

熊野講の餅つき唄

熊野講とは、旧暦二月十五、十六日ごろと十月十四、十五日ごろに、熊野の神に収穫を感謝するとともに、集落の安穏と家内安全を祈る行事であるが、県南地方では多くの集落で餅つき行事としておこなわれている。矢吹町では原宿の熊野講（町指定無形民俗文化財）が知られているが、明新でも十二月に熊野講がおこなわれる。また、中畑の平鉢でも近年までおこなわれていた。

行事は青年会が主催するが、費用は地区から出される。宿はもとは当番制で一泊二日でおこなわれたが、後に青年会長宅を宿にしておこなうようになった。その間、宿の家族は邪魔にならぬようにひっそりと過ごしたという。また、前日の午前中に家族をすべて物置か土蔵に別居させるとか、近所の親戚に預けたともいう。これは、熊野講の行事がもともと女人禁制だった名残である。現在は、主に地区の公民館前でおこなわれており、行事もかなり簡略化されている（第七章第四節一五原宿の熊野講参照）。参加者は宿の家に一泊するが、青年会長の許可を得たもの以外は帰宅してはならず、また外出しても火食（かじく煮焼きした食事）は厳禁である。宿では徹夜で話をしたり、碁・将棋などの遊びをしながら過ごす。

翌朝、まず行者（僧侶）を招いて加持祈祷してもらい、集落の安全、五穀豊穡などを祈った後、朝風呂にはいつてから、千本杵で餅をつきはじめる。餅をつきながら餅つき歌が歌われ、時折千本杵でからめた餅を天井にくつつくくらいまで高々と突き

あげる。

めでためてたの 重なる年は

天の岩戸も サマヨ打ち開く

旦那大黒 おかみさんも恵比須

できたその子も 福の神

おれとお前は 米なら五合

はやく一升になればよい

今年やどうでも 来年こそは

二つ枕で寝てみたい

どうだ皆様 おつもりやいかが

声もかれたし 疲れたし

(福島県教育委員会編・刊『福島県の民謡―第二回福島県民謡まつり記録』)

昭和五十七年 二六頁)

この後、各世帯一人ずつが餅をご馳走になる。また、最後にもう一度餅をつき、青年らが二組にわかれて、千本杵で餅の争奪戦を演じる。その後、青年らは杵からめた餅を掲げて凱歌をあげ、二人一組で千本杵を持ったまま集落内を回り、餅を供物として人々にちぎらせる。この日は昼食抜きで、夕飯は汁餅五合飯を残さず食べ終ると、椀、臼、鍋、釜などすべてきれいに洗って粕まで飲む。夕食後に火を消すが、最後の火を熊野大権現に献じて散会となる。



【写真25】原宿熊野講 (昭和59年)

馬喰節

古くからの馬産地であった東北地方の中でも、その玄関口にあたる白河周辺では、かつて仔馬こうまを買い求めて諸国から集まる馬喰ばくろによる馬の売買が盛んであった。白河地方に伝わる馬喰節は、そうした馬喰たちによって歌われた歌である。馬喰は馬を何頭も手綱てなわにつないで昼も夜も歩き続けるので眠気を払うために歌われたとも、またよい馬が手にはいったときに祝い歌として歌われたともいう。

東北地方でも最大規模の馬市であった白河馬市は、寛永六年（一六二九）に白河藩主丹羽長重が、領内の軍馬の買いあげと馬喰による売買の便宜を図るために開設したが、矢吹にも明治十七年（一八八四）に矢吹馬市が開かれ、近郷近在から多くの馬が集められ、東北・関東各地のほか、遠くは九州からも馬喰が馬の買いつけにきた。しかし、農耕馬の需要がなくなった昭和三十年代には白河馬市もなくなり、矢吹馬市（後の矢吹家畜市場）でも現在は牛の取引しかおこなわれていない。

白河地方に伝わる馬喰節の特徴は、湯のみや茶碗をたたいて「バカバカ」という馬の蹄ひづめの音があることである。また、尺八による囃子ばやしのせて歌われることが多い。矢吹の馬喰節もそうした白河地方の馬喰節の一つである。

矢吹の馬喰節

夕べ生まれた 栗毛こまの駒こまはよ

前は白足 流れ星よ

朝の出がけに 東を見れば

黄金まじりの 霧きりが降るよ

馬喰さんには なんにやあよく惚ほれた

まけろひけろは 袖の中よ

金の茶釜を あるよな話

いつてみりゃ 土瓶のふたもないよ

かかよ 今きた米味噌あるか

米味噌どころか 塩もないよ

白河市周辺で歌い継がれてきた馬喰節は、昭和三十八年に白河家畜市場が閉鎖されたのをきっかけに、失われようとしていた馬喰節を歌い継ぐため、馬喰たちが同年十月に結成した白河民謡馬喰節保存会によって継承されている。

土搗き唄

もとは土搗き^つの現場で歌われた仕事唄であるが、後に祝い唄としてタテマエ（建前）などの祝いの席で歌われるようになった。

町内では中畑に伝えられてきたが、農村部特有の悠長なテンポの歌である。

土搗き^{ぐら}槽の土搗き柱に結んだ綱をケロリ（作業を進める上で中心になる人）

の腰にあて、歌で調子をととり、土搗きを運行するように歌われる。歌うと同時に調子とりの技術を要した。江戸時代末期に関東地方から伝わった「木遣り唄」が変化したものとの説がある。



【写真26】矢吹の馬喰節（提供 水戸豊子）

中畑の土搗き唄

めでためでのたの 重なる年は

天の岩戸も 押し開く

ここは大事な 大黒柱

心そろえて たのみます

こちらの屋形は めでたい屋形

事業益々 五万石

囲りまわして いぬいのすまに

誠にめでとう おさめます

(前掲『福島県の民謡』一三二頁)

山唄(草刈り唄)

草刈り唄は古くから馬産地であった県南地方で広く歌われていた唄で、農家の日課であった草刈りの道中にうたわれたものである。泉崎村の鳥峠稲荷で盆踊りにうたわれていた「峠節」が元唄であるともいわれている。町内では中畑周辺などに伝えられていた。

草刈り唄

ハーハーエおれといがねが がしゃ裏山さ

なたと鎌持つてヨ あげび取り

草刈り遅くも 東見ておくれ

遅い速いは 東による

草をこう刈れ こう束まるけ

馬につけようが こうつけな

明日の浅草 どこで刈るおせな

明日は白狐窪の 土手刈る

峠かけ越し 本沼お昼

いやな白河 泊りがけ

(前掲『福島県の民謡』一二二頁)

長持ち唄

長持ち唄は、婚礼の宴席に欠かすことのできない歌であった。主に、花嫁が仲人につれられて実家を出るとき、中宿で嫁いり道具を受け渡すとき、婿方に着いて出迎えの人々とあいさつを交わすときの三回歌われる。矢吹町内では、羽鳥ダムの建設によって湖水に沈んだ羽鳥（現在の天栄村羽鳥）の集落から、第二次世界大戦後に矢吹高原に集団移転した人々により伝えられていた長持ち唄が知られている。

